

円滑な交通と快適な環境を求めて

葉山 峻
神奈川県
藤沢市長

Pursuing the Harmonious Traffic Situation and Comfortable Environment

Shun HAYAMA

Mayor of Fujisawa, Kanagawa Prefecture

藤沢市は、昭和30年後半からの高度経済成長によって急速に都市化が進むとともに、人口も、いまでは32万人に達し、湘南の中核都市として発展しています。また、首都圏の衛星都市として、本市の独自性を維持しながら、工業、商業、観光、産業のうえでも首都圏における重要な役割をこなってきています。

その中で、急激な都市化現象とモータリゼーションの進展は、さまざまな交通問題を発生させています。本市の自動車保有台数は、12万8,000台にも達し、また、自動車の発生集中交通量は約28万トリップエンドで、10年前と比べ約2倍の伸びとなり、市内各所で交通渋滞が発生し、事故の多発とともに大気汚染、騒音など環境面でも市民生活や都市機能に大きな影響を与えています。

交通手段は、いかに速く効率的に人間と物資を移動させ、高度経済成長を促進させるかに力点が置かれてきました。道路の整備も、とかく、車を効率よく通すことに力点を置いた施策がとられてきた傾向にあります。しかし、かつて道路は、単に交通の手段としてではなく、大人も子供もお年寄りも、すべてのジェネレーションにとって共有されており、子供にとっては遊びの場であり、大人にとってはコミュニケーションの場でした。今後わが国の社会は、高度情報化と高齢化が複合的に進行してゆくのですから、人と人のふれあいはますます必要になってきます。その意味で、道路も、人間生活にとって必要ないろいろな機能を、それぞれ分担できるようなネットワークに作り上げてゆく必要があります。

その一つの試みとして、本市の中央部を南北に流れる引地川の兩岸に、水と緑の調和のとれた「川べり遊歩道」の整備を行ってきました。当初は、引地川右岸に車の交通を重点に12mの都市計画道路を計画していましたが、幅員を6mに縮少し、緑の空間を確保し、子供からお年寄りまで、散策や魚釣りなどができるようになっています。

このような観点に立って、将来にわたる総合的交通政策を検討するため、学識経験者、交通運輸関係者、市民など21人による「藤沢市交通政策懇話会」（会長・法政大学教授広岡治哉氏）を設置し、57、58年度の2か年にわたり調査、研究をすすめてきました。

本市は、首都50km圏内にあり、日本屈指の海浜レクリエーション・ゾーンをかかえ、加えて、北部方面に新たなまちづくりが進みつつあり、自動車の通過交通と通勤通学の輸送力、南北方向の交通体系の整備などが必要となっています。ハード面からは、(1)通過交通の改善策——新湘南国道の早期建設と国道134号線接点への計画策定など、(2)通勤、通学の輸送力増強——横浜市営地下鉄の湘南台への早期延伸、根岸線の大船以西への延長、(3)南北交通体系の確立——新交通システムの導入の検討などがあります。しかし、道路整備等ハード面の対策だけでは不十分で、都市としての次の発展段階に対応するためには、子供やお年寄りが、安全で快適に交通手段を利用でき、人間同士のふれあいの場となるような、道路利用システムやバス運行システムなど、ソフト面での交通管理システムの確立を含めた総合的な施策を展開する必要があります。

本懇話会から数多くの提言をいただきましたが、今後、国、県をはじめ関係機関、市民との協力を得て、具体化を図って行く考えです。

原稿受理 昭和59年6月19日